3-4

「現代『日本』考古学」をふりかえる

吉田　泰幸

セミナーシリーズ第 3 回は日本考古学を英語圏に発信し続けているゲストスピーカー 2 名をお呼びして開催した。発信の内容はスピーカーのバックグラウンドで異なっている。溝口孝司氏の場合は氏が専門とする弥生時代から古墳時代を中心にした日本の考古学研究（例えば Mizoguchi 2003、2013）と、日本考古学自体の言説構造の分析（Mizoguchi 2006）である。後者は本セミナーシリーズのテーマ、「考古学と現代社会」に直結する。岡村勝行氏は博物館や第 5 回で言うところの「まいぶん」、緊急発掘を担当する調査組織での勤務経験が長いことから、それらの特徴を英語圏に発信している（例えば Okamura 2011）。開催当時、松田陽氏との共著『入門パブリック・アーケオロジー』（2012）が刊行されて 1 年強が経過していた。考古学と社会の接点を広く研究対象とする学問とされている「パブリック・アーケオロジー」はセミナーシリーズの趣旨にも合致しており、またなぜ日本で「パブリック・アーケオロジー」なのかを議論するには、格好のタイミングでもあったと思う。

第 3 回は IC レコーダーの不調で他の回と異なり、詳細な内容を伝えるものではない。加えて、当日にゲストスピーカーお二人のプレゼンテーションファイルをお預かりすることも失念していたので、本書執筆に際して改めて送付いただいた。筆者自身、両ファイルを見ると記憶とは異なる部分もあり、新鮮に映ったことも多かった。そうした改めての印象などをもとに適宜各発表に言及し、かろうじて話の流れは復元できた対話部分と合わせながら第 3 回を振り返りたい。

システム理論と日本考古学の Obduracy

溝口氏の講演は氏の英語で刊行された**代表的な著作の一つと同タイトル**である。氏は自身の研究アプローチを「社会考古学」と称している。筆者はこれを、過去の社会の考古学的研究と、社会における考古学についての研究の二重の意味があると理解している（溝口氏スライド 9）。その際に氏が依拠することが多いのが**ニクラス・ルーマンの社会システム理論**である。その他、**アンソニー・ギデンズ**などを参照しつつ、日本考古学の言説構造を解析している。特

に冷戦構造下（Mizoguchi 2006: 80 の Figure 4.5）と late- /high- /post-modern 状況下の構造を比較した図（同 : 158 の Figure 5.2）が、氏が展開する議論の基盤の一つと考えられる。前者の図では shared illusion が後述する二項対立と結びつき、後者の図では destroyed shared illusion が fragmental value と結び付けられていることから、「**大きな物語の喪失**」とも称されるポストモダン状況への変化を念頭に置いているだろう。日本考古学におけるかつての「大きな物語」が何かはとらえどころがない。日本における考古学研究は文化史的研究を基盤としつつも、解釈の段にあってはソフトなマルクス主義の影響が強いと評されることも多い。その理解に基づいて前者の図、冷戦構造下の日本考古学の言説構造に示される二項対立、具体的には「共産主義と資本主義、革新と保守、貧者と富者、保護者と破壊者、善／悪と悪／善」を見ると、日本考古学では多くの人は各二項対立における前者のポジションにいるという共同幻想に浸ることができた。しかし、それが失効した後は、溝口氏のスライド 26 にある「さまざまな調整共同体をめぐる多層的な綱引き／闘争」に否応無く組み込まれていることを自覚せざるを得ず、「＜考古学を生きてゆく＞」困難さは増している。こうした現状認識を示し、そのいくつかの事例をあげたのが前述の著書である。・・・という筆者の理解が妥当かどうかは実はおぼつかないのだが、溝口氏の社会考古学研究の特徴は**言説構造を解き明かす枠組みやダイアグラムを提示**し続けることにあると理解している。岡村氏がサイモン・ケイナー氏の「日本は Implicit Archaeology」という発言を引いているが、これを各論者がよって立つフレームワークを明示せず、暗黙のうちに議論らしきものが繰り返されて

代表的な著作の一つと同タイトル　"Archaeology, Society and Identity in Modern Japan" (2006) の邦訳となっている。セミナーシリーズ第 3 回を迎えるにあたっては同書の Chapter 1: Archaeology in the Contemporary Japan と Chapter 5: Fragmentation, Multiculturalism, and Beyond、Okamura2011 を読書会での課題論文とした。

ニクラス・ルーマンの社会システム理論　ドイツの社会学者、ニクラス・ルーマン（Niklas Luhmann）の社会の基本構成単位をコミュニケーションとする考え方。膨大なルーマンの業績を踏まえた上でのシステム理論の理解は困難と考えられるため、溝口 2015 の中でも勧められている入門書クニール・ナセヒ 1995 が理論の大要を掴むには最適と思われる。

アンソニー・ギデンズ　Anthony Giddens
イギリスの社会学者。社会性がどのように生み出され、再生産されるのかについての「構造化理論」、「再帰的近代」の概念で知られる。溝口氏の言説構造の図解化はギデンズの影響が強いと考えられる。第三の道（The Third Way）を提唱し、トニー・ブレア政権での政策ブレインであったことでも著名。

「大きな物語の喪失」　フランスの哲学者、リオタールが『ポストモダンの条件』（1979 年）で提唱した概念。西洋の科学の正当性を支える大きな物語への不信感が蔓延した状態を指している。この場合の大きな物語は、啓蒙主義やマルクス主義、テクノロジーの発展に支えられた資本主義によって人々は現在おかれた現状から救済、解放されるという近代を特徴付ける理念のようなものである。

いるのが日本考古学と読めば、溝口氏のようなアプローチは余計に必要なのである。

そのために溝口氏が基盤としているのがニクラス・ルーマンの社会システム理論というのは、第1・2回ともにキーワードとなったObduracyと関係づけると興味深い。社会システム理論は生物学で生まれたオートポイエーシスという考えに一部依拠しており、それは溝口氏のスライド6にあるように、コミュニケーションを「自律的なシステム」とする見方に繋がるからである。後述するようにコミュニケーションは「こうなりたいにはどうするか」に基づく二項対立に規定され、日々再生産されているものとされる。自律的であるがゆえに、例えば「日本考古学はこうであるべき」という強いObduracyは生じる。溝口氏の分析では日本考古学というシステムはその「『閉じ』具合が高」く、それを打開するため、自律的なシステムの行方を変えるための方策が、自らが英語圏で発表し続けることと、英語によって「違和感」という新しい風を起こすことであると言う。そのひとつには英語を公式言語とするWACを日本で開催することも含まれるのであろう。スライド6にあるように「コミュニケーションの行方はコントロールできないし、予期できない」としながら同7で「秩序のないジャングルか」というとそれは「あり得ない」としてシステム理論によってその解析を目指すように、極端に悲観的で一方では楽観的という落差には、読書会で溝口氏の論文を取り上げた時に大学院生も戸惑い気味だったのだが、日本考古学のObduracyを解きほぐす溝口氏の言葉の端々には、相対的若年層に向けたメッセージも見て取れる。Obduracyの割を食うのは後続世代だからであろう。

コミュニケーションを規定する二項対立

溝口氏は対話の中で、英語で上記のような日本考古学分析を書く理由について、「ある種の人々の神経を逆撫でしかねない内容の発表を日本語でやり続けると、おそらく私は日本考古学の枠組みで研究者として存続できない」からだと述べている。今回のように日本語での発表となると、ある種の人々の神経を逆撫でしないような配慮はあったのかもしれない。アイデンティティとコミュニケーションを軸とした分析部分のスライド（10 ～ 26）で具体的な事例があげられることが少ないのもそうした配慮かもしれない。もとより溝口氏のアプローチは理論考古学とも言われる。様々な事例を説明できる汎用性の高い理論

言説構造を解き明かす枠組みやダイアグラムを提示　近年ではMizoguchi 2015: 14・19のリソースへのアクセスとセルフ・アイデンティティの獲得が容易か困難か、考古学的データを生産する側か消費する側かでマッピングを試みた四象限のダイアグラム。

の構築に重きがあるとすると、必然的に抽象度が上がるとも言えよう。多少具体的な場合でも、筆者の見る限り、ある程度の専門知識を前提としている箇所が多い。そこでここではできるだけ具体的な事例に引きつけつつ、頻繁に「／」（スラッシュ）や「：」（コロン）で区切られ対置されているキーワード群を読み解いて行きたい。以下に筆者が述べる具体的事例は序章で触れた筆者自身のバックグラウンドに起因している。そうした事例に触発されて、さらに読み手それぞれが自身に置き換えることができれば、この小文の解題としての役割は果たしたことになるだろう。

溝口氏が検討対象とするのは A: 世界はこうであるべきだ／こうであるべきではない、B: 考古学である／考古学ではない、C: @@ 考古学である／ @@ 考古学ではない、の二項対立に起因するコミュニケーションで、C よりも B、B よりも A がより規定的で抽象度も包括度も高まっていく。A の分析を見ると（スライド 22）、もはや考古学内部の言説構造を超えて、＜ウヨサヨ言説空間＞に代表される日本社会全体の言説構造分析の様相も呈している。逆に言えば、C から A に行くにしたがって社会との接点がより問題となるので、パブリック・アーケオロジーの研究対象を考古学と社会の接点一切合切とすれば、パブリック・アーケオロジーの課題として読むこともできる。溝口氏は B、C、A の順番に分析を進めているので筆者もそれに倣うことにする。

B: 考古学である／考古学ではない、を分析する必要性は、対話の中の発言にあるとおり、「『考古学ではない』と言うその根拠が不明確なことがあって、根拠を問うと、根拠を求めて問うこと自体がけしからん、とさらに咎められることが日本ではよくあ」るからであり、それが非寛容な態度、ひいては非民主的な言説空間を構築しているという認識に基づいている。「考古学である」例のひとつが「土器の非多変量解析的分類編年」で、その反対の「考古学ではない」例が「土器の多変量解析的分類編年」とされているが、その対比を具体的にイメージするには、一定の考古学的知識を必要とする。より多くの資料を相手に多変量解析という統計手法を用いる編年研究は「考古学ではない」、層位などの出土状況からみた前後関係がはっきりする少量の標本資料をもとにした編年研究は「考古学である」ということであろう。そういったコミュニケーションを（おそらく）溝口氏は目にしたということを示しているが、どちらも研究のための手法には違いない。しかし前者のみが否定的に「そんなもの考古学ではない」と断定される背景にある、後者の研究姿勢がもとにしているはずの「さまざまな前提の共有」を強要する、ないしは「無自覚の前提」とする＜無媒介

「／」（スラッシュ）や「：」（コロン）で区切られ対置されているキーワード　スライド中の「／」（スラッシュ）は時々二項対立を示すものではなく、言い換えの時もあるように見受けられる。

の作法＞を問題としている。これはもう少し噛み砕けば、**特定の「型」**の強要と言えるかもしれない。

上記に続く、日本考古学独特の知識体系を前提とする「土器の『文様帯系統論』依拠分類」は「考古学であ」り、「文様帯系統論」に依拠しない分類は「考古学ではない」という例も、「文様帯系統論」という「型」を強要するようなコミュニケーションが頻発していることを指しているのだろう。「文様帯系統論」は山内清男氏（やまのうち・すがお、以下敬称略）という縄文土器編年研究を基礎付けた研究者が提唱したものだが、セミナーシリーズ第 6 回において大塚達朗氏が「文様帯系統論」に疑義を呈しているとおり、「文様帯系統論」への疑問も、それに依拠しない研究方法も「考古学であ」りうるのだが、それを「文様帯系統論」に疑問を持ったことがないままに＜無媒介の作法＞で考古学ではない、と封殺するコミュニケーションがここでは例として出されている。筆者は指導教員の影響もあって**山内清男のテクストが教典化されていない**環境で考古学を勉強したためか、「文様帯系統論」に関する「型」を研究室内で強要された経験はなく、研究室外でそれを当然視する人に遭遇したことがあるという程度だった。2017 年現在で上記のような土器研究に関する「型」が様々な場で強固かどうかは判断がつかないが、それ以外の様々な「考古学はこうあるべき」という「型」にはいくつか遭遇した。おそらくこれらにも本書であつかったテーマとの関係で触れておいた方がいいだろう。

一つは、土器研究に関連して、「土器編年を理解したのち、他のテーマの研究ができる」というものである。これはセミナーシリーズ第 6 回の参加者で 20 代後半の研究者が口にしているので、今でも各所で言われているのだろう。第 4 回で羽生淳子氏が述べるように、ある事象の変化を追う時に、少なくとも縄文時代以降は多量に出土して変化も多い土器を基準に相対編年が組み上げられていることが多いので、勉強した方がいいのは確かであるが、土器編年研究とその他のテーマの研究がお互い補完し合う関係になることもあるだろう。他に、「何を食べているかがわかならければ社会のことはわからない」、つまりは生産

特定の「型」　アートルと筆者の本書に関する打ち合わせにおいて、ひとつのキーワードは日本語の「型」にしようと話し合っていたが、奇しくも溝口氏も考古学理論に関する論文の中で「考古学的コミュニケーションの『型』」という表現を用いている（溝口 2016）。溝口氏のご教示によれば、ここでの「型」は英語に置き換えれば“Norm”とのことである。

山内清男のテクストが教典化されていない　筆者の大学・大学院の指導教員、渡辺誠氏は縄文時代研究における土器編年研究偏重の傾向を手厳しく批判していて、土器編年研究の重要性は一応説くものの、山内清男が話題になることはほぼなかった。学部を関東の私立大学で卒業して名古屋大学大学院に入学してきた学生が、「なぜここの学生は山内清男を話題にしないのか」と不思議がったことがあった。

基盤の研究を優先すべきというものがある。これも羽生氏の発表に見るように、社会組織と無関係に生産活動を考えることもできないと考えるのが現代の社会を見ても言えることであり、これは下部構造が上部構造を規定するというマルクス主義考古学によって立つ「型」かもしれない。ただし、上記の言葉を発する人がその前提に無自覚なことは多い。その他、「資料紹介をいくつか積み上げてから論文を書く」というものもある。資料紹介は資料の記述に重点があり、それこそが考古学の基礎であるという考えに基づいている。もちろん記述能力、正しくはモノを情報化して共有化を図る技術が重要なのは否定しないが、論文を書くことは別のトレーニングが必要で、それを強要するといつまでたっても論文が書けない事態に陥りかねず、筆者は学生にはこのような「型」をお勧めしない。こうして見ると、筆者が遭遇した「考古学である」ことの内実は、段階を踏むことを推奨するものが多い。溝口氏も研究者としての形成期に、ある程度未熟さを咎められるようなことは必要だとしているが、「痛みの感じられない議論はだめ」と排除することは問題視している（スライド 17）。上記の三つの例はいずれも段階を踏むという痛みの後に素晴らしい研究ができるという内容だが、実のところ上記を「型」どおりにこなしている人は筆者のみる限りそれほどいるわけでもなく、上記の言葉を発する人のほとんどは自分が経験もしていない痛みを他人に強要しているとも言え、想像上の「型」の負の側面は根深い。さらに、＜無媒介の作法＞の一部と考えられるものに、「考古学は男がやるものだ」というものがある。確かに**男性である痛みは女性には分からないかもしれない**が、このコミュニケーションの連鎖の結果、何を引き起こしているかは、第 4 回の「ふりかえる」文章にある複数学会の女性発表者比率の比較を見ると明らかである。これが＜無媒介の作法＞による排除の結果とすると、日本考古学を非民主的言説空間と名指ししても、言い過ぎではないかもしれない。

次の C: @@ 考古学である／ @@ 考古学ではない、の二項対立になると、想起されるものの具体性は増してくる。スライド 19 にみる区分は、1945 年以前において縄文時代研究は「安全」で、弥生・古墳時代研究は「危険」な考古学であったという溝口氏の図式（Mizoguchi 2006: 65）が思い出されるが、この区分は戦後も基盤的前提の一部であり続けているという理解であろう。スライド 20 の縄文が＜自然＞史で弥生が＜政治＞史というのは、縄文時代研究では生態学的

男性である痛みは女性には分からないかもしれない　ノンフィクション作家の澤宮優が取材した「考古学エレジー」（澤宮 2016）の中には、「あの娘（こ）は良家のお嬢さん　おいらはしがない考古学徒　どうせ叶わぬ恋ならば　トレンチ掘ってあきらめよ」という歌詞がある。武末純一氏が取材に答え、「今考えると男性中心の唄ですね。勝手な女性像を作り上げて押しつけているようにも思いますが、あのときの心情だったのでしょうね」（同 : 280）と感想を述べている。

視点、環境への適応を問題にすることが多いが、弥生時代研究では階級社会ないしは社会進化論に則れば首長制社会の成立が主題になりがちであることを指している。スライド 21 で縄文•弥生が日常考古学、古墳が墓考古学というのも、研究対象の傾向性とともに、それぞれの @@ 考古学研究者が対象に向き合う時の思考の枠組みの傾向性を指しているものとみていいだろう。筆者が注目したいのは、この区分は狭義の考古学内部の言説構造だけでなく、それ以外でも観察できることである。縄文・弥生の区分は**坂本龍一・中沢新一氏の『縄文聖地巡礼』**（2010）にみられる、縄文が自然と共生した多様性、弥生が自然を征服するモノカルチャーという二項対立に繋がっているとみることもできる。また、縄文が＜人類学（受容への寛容性）＞となっているのは、小山・安芸氏による民族考古学に依拠した復元イメージを想起させる。この再生産されている「型」を破ろうとする研究、例えば縄文時代における階層化社会の可能性を論じた研究は、縄文研究に弥生的な＜政治＞史を持ち込む試みとすることもできるが、これには否定的意見も多かった。そこでの批判の仕方が＜無媒介の作法＞、対立している二項のどちらかに依拠した「型」の強要だったのかは検討の必要があるだろう。

超越的なものと日本

A: 世界はこうであるべきだ／こうであるべきではない、の分析になると、超越的存在によってアイデンティティを獲得することと考古学の関係についての分析と、近年の日本社会の言説構造の分析が混在しているようにもみえる。何に対しても「かわいい」と言う人々が話題になったのはいつぐらいからか筆者も記憶にない。そこにほとんど理路は存在しないものの「かわいい」か「きもい」かで世界をみているかのような人に心当たりがある人も多いだろう。この理解を援用し、ただ超越的に「かわいい」とされる対象は考古学でもありうるとして、かわいい縄文・弥生・古墳があげられている。セミナーシリーズ第 3 回を開催した 2014 年時点では、古墳にコーフン協会が設立されて 1 年経ったかどうかという時期であったが、その後の**フリーペーパー『縄文 ZINE』**の刊行などをみると、予見的であったと言える。

坂本龍一・中沢新一氏の『縄文聖地巡礼』「もっとさかのぼれば、約一万年前にはじまった農耕の発明によって、人間が環境を改変しはじめた。モノカルチャーのはじまりですね。それが現代まで続いてきている。使っている頭の構造は旧石器時代もいまも同じかもしれない。だけど、そのなかからひとつの方向を選び出して、技術の発達によって核まできてしまった」（坂本・中沢 2010: 21）にあるように、農耕の発明がモノカルチャーのはじまり、すなわち効率化の始まりで、その思考が原発の発明に繋がった、だからそうではない縄文に着目しようという趣旨の発言が各所でみられる。

「日本的なるもの」を超越的存在とし、そのルーツとして結びつけられるのは縄文も例外ではない。羽生淳子氏が問題としてきた1990年代の三内丸山ブームの中での縄文文明論などは、研究者でかつ出版界で著名な論者によるものだったが、前述の『**縄文聖地巡礼**』にも monodukuri に関する記述がある。日本の場合、「天皇」や「皇室」が究極の参照軸になる場合もあるのだが（スライド14）、この事例としては中沢新一氏の別の著書、縄文海進時には陸地ではなかった沖積低地を色分けした「縄文地図」で東京を散策することを推奨する『**アースダイバー**』（2005）における東京の都市構造の中心として皇居を位置付ける部分が思い出される。

こうした結びつけ方に、X: 科学としての考古学は確かに無力である。『縄文聖地巡礼』の中の、「日本の中では考古学が、茶道や華道のような家元制度の芸とよく似た発展をしてるなと思いますね。ひとつひとつの所作にものすごく重大な意味を持たせて分類されていくんだけど、それは閉じられた世界の中だけで意味を持つことで」（坂本・中沢 2010: 129）という指摘自体は、再三にわたって筆者が「型」という比喩を用いてきたように、的を射ている部分もあるからである。以上のように多少なりとも具体的な事例に引き寄せて溝口氏の分析をみようとすると、C と A では日本考古学内での言説構造を反映したかのような社会現象を例に取り上げる必要があった。このことは、考古学と「パブリック」の間でも、フーコー的な意味での＜闘争＞、不断のコミュニケーションによる相互の変容が必要となってくることも示唆している。これは多分、コミュニケーションにかかるコストが大きい、しんどいことである。「しんどい」は人によって受け取るニュアンスが異なるかもしれないが、後段のパブリック・アーケオロジーのキーワードの一つとしたい。

フリーペーパー『縄文 ZINE』 ニルソンデザイン事務所が2015年8月から刊行・配布を始めたフリーペーパー。ZINE はホチキスで閉じた少部数のハンドメイド感の高い小冊子のこと。『縄文 ZINE』のデザインはハンドメイドを超えたプロの仕事感があるが、コンテンツは手作り感にあふれている。縄文時代の考古学のみならず、「縄文的だ」と認識されたものはなんでも特集の対象となる。表紙は毎号、縄文土偶のポーズをとった女性。
URL: http://jomonzine.com（2017年2月7日にアクセス）

『縄文聖地巡礼』にも monodukuri に関する記述がある 「そこ（筆者註：縄文時代の諏訪のこと）には、いまの日本人がもっている創造性、ものづくりのうまさ、元気、明朗さといったものがもうすでに姿をあらわしている。いや、それどころか、いまよりもすごい力量を発揮していたと言えるでしょう」（坂本・中沢 2010: 16）

『アースダイバー』（2005）における東京の都市構造の中心として皇居を位置付ける部分 第11章「森番の天皇：皇居」では、都心の森である皇居、歴史的偶然からそこを居とするに至った天皇制に、グローバリズムに対抗するアジールとしての可能性をみている。

なぜカタカナの「パブリック・アーケオロジー」なのか

岡村勝行氏の発表は当時、福島県文化振興財団に派遣されていたこともあって、福島県での災害復興事業に伴う事前発掘調査での体験から始まった。岡村氏は大阪からの派遣であったが、そのほかにも全国各地の教育委員会などから職員が派遣されている。こうしたことが可能になったのもセミナーシリーズ第5回であつかった「まいぶん」、埋蔵文化財保護体制があってのことだが、非常に整備されているがゆえに、対話の中でアートルが発言したように、「パブリック・アーケオロジーを批判する人の言い分としては、『それは既にずっとやっている／やられている』という意見」がある。安芸早穂子氏も、第2回の対話の中で三内丸山遺跡に深く関わった教育委員会の人々を「ずっと積み重ねでパブリックアーケオロジーを実践してきた人たち」と評している。こうした、「すでにやっている」という声はアートルのみならず、筆者も聞いたことがある。そうした中、なぜカタカナの「パブリック・アーケオロジー」なのだろうか。

外来語もすべからく漢字に置き換わる中国では、同様の分野を**「公衆考古学」あるいは「公共考古学」と表記する**。溝口氏も別の講演では「公共考古学」（溝口 2015）の字をあてているので、このどちらかで松田・岡村氏共著の本が出版された可能性もゼロではない。しかし、結果的にカタカナの「パブリック・アーケオロジー」となった。これは public の持つ意味合いが日本語に置き換えにくいことに加えて、公（おおやけ）という語の持つ歴史性とも無関係ではないだろう。公共哲学に関する講座本では、『日本における公と私』、『欧米における公と私』に10巻中2巻（佐々木・金編 2002a・b）をあてており、一筋縄でいかない問題であることがうかがえる。その中に、ヤマト言葉としての公（おおやけ）についての興味深い解説（水林 2002）がある。それによると、「オホヤケ」は小さなヤケ（在地豪族の敷地・建物群からなる一区画の経営施設のことであり、奈良時代では「宅」、「家」があてられる）に対しての大きなヤケであり、「オホヤケ」と小さなヤケの「ヲヤケ」は重層構造をなす国制を意味し、中国では戦国期か秦漢帝国期に国制のあり方が国家＝（官）と社会＝（民）が分離する二元的国制をとるが、日本で二元的国制が完成するのは明治時代ということである。少なくとも public には、private よりも上、あるいは大きいというニュアンスはない。日本には上記の社会＝（民）に相当する中間集団として、明治時代以前でも「講」などの存在が知られており、日本に中間集団たる社会＝（民）が形成されてから日が浅いというのが妥当かどうかわからないが、public に「公

「公衆考古学」あるいは「公共考古学」と表記する　秦小麗氏のご教示による。

共」をあててしまうと、上記の歴史的経緯からも国家＝（官）あるいは行政という意味に受け取られることは多いかもしれない。

そして、そのような意味での公共＝官製考古学は、戦後の文化財保護法の成立以降に日本考古学が作り上げてきたものではある。その官僚機構の構造と日本語の「公共」の意味合いは確かに重なるかもしれない。そして、その公共＝官製考古学では、例えば「普及啓発」の名の下に社会教育的活動は確かに盛んでもある。そうした認識のもとでは、「パブリック・アーケオロジーはずっとやっている」という反応（したがってなぜいまさら横文字で言い直す必要があるのかという反応）が出てくるのは避けられないことだろう。この反応に着目し、「ずっとやっている」の内実と、カタカナのパブリック・アーケオロジーの意味するところを考えてみたい。

「パブリック・アーケオロジー」はずっと行われてきたのか

岡村氏はパブリック・アーケオロジーの歴史にも触れており、最初に提唱されたのは 1970 年代のアメリカで、緊急発掘について市民からの理解を得ることが主眼のひとつだったようである。この出発点だけみると、今の埋蔵文化財保護体制のもとでの「普及啓発」を主眼とした社会教育的活動とあまり違いはないように見える。しかし、岡村氏の発表を見ると、その後、パブリック・アーケオロジーはその幅を広げてきたことがわかる。

英国とオーストラリアという英語圏では、1970 年代のアメリカとは異なるコンテクスト、岡村氏が「解明」される過去から「考察」される過去と称したポストプロセス考古学の台頭にも影響を受けて、パブリック・アーケオロジーは幅を広げたようである。具体的には先住民アボリジニを抱えるオーストラリアでは過去をめぐる政治問題の表面化（オーストラリアと同じく先住民問題を抱える北米でも同様）、英国では帝国主義の負の遺産としての文化財返還問題に目を向けたのが一例であろう。また、英国のサッチャリズムに端を発する市場主義経済の深化によって、1970 年代のアメリカとは異なる意味で成果の市民への還元が求められるようにもなってきている。当初の「普及啓発」路線は、“Public Archaeology”（Merriman ed. 2004）の編者、Nick Merriman の整理によれば “The Deficit Model” (Merriman 2004: 5)、考古学的知識が豊富な考古学者が、それらが足りない人々にその欠を補う関係と言える。これにコミュニケーションの議論を重ね合わせれば、コミュニケーションコストは少ない。対して、その後の展開で立ち上がってきた “The Multiple Perspective Model”（同 : 6）において、その多様な視座には考古学的実践そのものへの批判や疑義も含む。後者においては、考古学者は自分自身の活動に常に反省的である必要もあるし、多様な視座で考古学に関わろうとする人々の間をとりもつファシリテーターとし

ての役割も求められ、コミュニケーションにかかるコストは大きい。

日本でパブリック・アーケオロジーは「ずっとやっている」と言った場合には、公共＝官製考古学の枠組みでコミュニケーションコストの少ない方法を洗練させてきたと言えるかもしれない。対して、コミュニケーションコストが大きいパブリック・アーケオロジーとは、日本において何だろうか。上記の「帝国主義の負の遺産としての文化財返還問題」は日本においても、韓国やアイヌとの関係を想起すれば、確かに存在する。その他、このセミナーシリーズで扱っている話題というのは、多様な視点で考古学、あるいは考古学に関わる活動自体を反省的(reflexive)に見るものでもある。こうしたことは確かにわざわざコミュニケーションコストを上昇させる、しんどいことかもしれない。しんどいことは、日本考古学においてずっと忌避されてきたのだろうか。

溝口氏は「『既にやってきた』という発言は禁止すべき」で、「以前と今の考古学がおかれているコンテクストを比較して、その上で意味があるかないかについて発言すべき」とする。岡村氏が指摘するように、考古学的活動に占める緊急発掘調査の圧倒的な比重とそれを担うのは文化庁、都道府県、市町村である。この、オホヤケとヤケの重層構造をもつ官によって整備された埋蔵文化財保護体制は国際的にみても整備されたものであり、その中で普及・教育活動が盛んになった。その体制の中ではコミュニケーションコストは相対的に少ないのかもしれない。しかし、この行政主体の調査がアンビバレンツな側面が強かったことは、「考古学エレジー」を追いかけた書（澤宮 2016）でも改めて知ることができる。緊急発掘調査は大規模な遺跡破壊に加担しているだけではないかという問いである。そこで興味深いのは、「官」に関わる考古学者は表立って遺跡保護の声をあげることはできないので、曖昧な位置にいる人々と**ほぼ共犯関係で「文化財保護」**、調査期間をより長くとった学術的な記録保存の充実や史跡公園化を行なっていたことである。河村好光氏によれば、同様の関係は石川県の行政と石川考古学研究会でもあったらしく、官と中間集団が示し合わせての「文化財保護」とも言える状態など、一口に行政主体といっても、そのコンテクストを検討してみると、コミュニケーションコストが大きい、しんどいことをしてきてもいる。日本にはそうした先達の葛藤なども抱えつつ、行政主導の埋蔵文化財保護システムを作り上げて、コミュニケーションコストを下げてきた独特のコンテクストがあり、その意味では「ずっとやってきた」のかも

ほぼ共犯関係で「文化財保護」 石野博信氏が兵庫県尼崎市の田能遺跡の保存運動を振り返って、「佐原さんを中心にして、これはすごい遺跡だから残したいということだった。だけど彼らは国家公務員（筆者註：佐原眞氏は当時奈良文化財研究所職員）だから運動の表には出られない。それでも裏方はなんぼでもやると言って、いろんな方面との連絡をやってくれました」（澤宮 2016: 117）と述べている。

しれない。同時に、それとは趣は異なる、実は日本にもあるがまだあまり語られていない「しんどいこと」を考えましょうというメッセージを、カタカナのパブリック・アーケオロジーは含んでおり、これはやはりこれから行われることでもある。

そうした中、岡村氏が「日本におけるパブリック・アーケオロジーを考える」とした理由とは何だろうか。世界考古学会議（World Archaeological Congress、通称 WAC）は成り立ち自体が政治的であり、コミュニケーションコストが大きい、しんどいことを厭わないトピックを重点的に論じる会である。その京都での開催まで、セミナーシリーズ第 3 回の開催時はあと 2 年強という時期だった。WAC とパブリック・アーケオロジーは重なる部分が多いため、そういうことを伝えたかったのかもしれない。本書は第 8 回世界考古学会議京都大会（WAC-8 Kyoto）が終了して半年あまり経過した時期に執筆している。次に、筆者も参加したその WAC-8 Kyoto はどんなものだったのか、ふりかえってみたい。

WAC-8 Kyoto 後の日本考古学

WAC-8 Kyoto をふりかえる文章は、すでにいくつか発表されている（例えば岡村 2016 やケイナー 2016）。大会の概要はそれらの方が簡潔にまとめられているので、ここではそれら以外の声、特に WAC を反省的に語る声を拾ってみたい。特に、日本人参加者に対する論評である。

「第 2 考古学」というブログで伊皿木蟻化（五十嵐彰）氏はセッションテーマと日本人参加者の関係を検討している。いわゆる WAC らしいテーマ群、文化財返還問題や倫理問題、教育問題など社会問題や過去と考古学の関係を考えるセッションよりも、過去を明らかにする、つまり他の学会でも扱うテーマのセッションに日本人参加者が集中している傾向を指摘している。SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）上で筆者の友達の友達であったからたまたま目に止まった、この点についてのより直接的な批判としては、「日本人の勘

「第 2 考古学」
URL: http://2nd-archaeology.blog.so-net.ne.jp
以下のポストでセッションテーマと日本人参加者の関係が検討されている（いずれも 2017 年 2 月 7 日アクセス）。
URL: http://2nd-archaeology.blog.so-net.ne.jp/2016-09-07
URL: http://2nd-archaeology.blog.so-net.ne.jp/2016-09-14
URL: http://2nd-archaeology.blog.so-net.ne.jp/2016-09-21

SNS 上で筆者の友達の友達であったからたまたま目に止まった 「日本人の勘違い発表」を含むこのポストは、投稿者は「公開」設定にしていたが、SNS 上の「公開」であることを鑑みてここでは匿名とする。

違い発表」というものがある。「勘違い発表」とは、WAC の趣旨を理解していない、現代社会との関わりには無関心なナイーブな発表ということであろう。筆者は WAC では「アートと考古学」のテーマでサテライト会場・建仁寺両足院の展示に関わった。研究発表の方は伊皿木氏も指摘するとりわけ日本人参加者の集中度が高い「玉とビーズ」セッションであり、そこでの発表は私を含む日本人研究者もアメリカ、中国、オランダ、インド、ミャンマーの研究者の発表も「勘違い」だったのかもしれない。このセッションには第 3 回の対話で「（溝口氏と違って日本考古学に）ストレスを感じていない」と発言した河村好光氏も参加した。個人的には、氏のような研究者も発表者として参加したということが、これ自体はごく小さな出来事だが日本考古学の Obduracy とは反対のモーメントにつながっていくと思いたい。少なくとも筆者は英語での学会発表を躊躇している日本の考古学者がいれば、「あの（河村氏には甚だ失礼かもしれないが）高齢の河村先生だってしんどいことをわざわざやったのだから」と実感を込めて、母語ではない場、違和感を感じる場に乗り出すことを勧めるだろう。

もとより、WAC が日本で開催されたからといって、突然何かが変わる訳でもなく、それは過度な期待と思う。一方で、WAC 的なテーマが日本に全くないわけでもない。普段、それらを語っていないだけだとすると、WAC-8 Kyoto が終了してこれから、どうするべきなのだろうか。筆者は、国立民族学博物館の共同研究「考古学の民族誌」に参加、協力をお願いするためにアートルとともに九州大学の溝口研究室を訪ねた時に、溝口氏が「日本版 TAG ができたらいい」とふと話したことを思い出す。TAG（Theoretical Archaeology Group）は名称だけみると身構えてしまうが、筆者が英国滞在中、2015 年 12

TAG（Theoretical Archaeology Group）
1979 年設立。年に 1 回英国内でカンファレンスが開催される。それらに加えて北欧、北米、中央ヨーロッパやトルコでもこれまでに開催されている。TAG の評議員は Colin Renfrew、Timothy Darvill、Andrew Fleming（故人）。

名称だけみると身構えてしまう　筆者が TAG に参加することを聞いた UCL (University College of London) の学生の反応は、TAG は“Scary”（怖い）であった。英語圏でも「理論」と聞くとそのような印象らしい。TAG は毎回全体テーマを設定しているが（2015 年は Diversity であり、基調講演を行なったのはトランスジェンダーの「男性」だった。講演者名として二つの名前を使用していた）、各セッションのテーマは全体テーマに何らか引っかかっていればいい程度のものが多く、いい意味で「ゆるい」印象を筆者は受けた。筆者が自身の発表の場であった“General Paper”以外に参加した主なセッションは“A Motion for Debate: This House Believes That Archaeological Resources are not Finite, and are Renewable”、“Diversity of Ages. Mind the Gap: Where are the Young People in Archaeology”、“Tyrannical Tales? Fiction as Archaeological Method”、“Rethinking the Archaeological Map”などである。いずれも、日本考古学でも似たような話題はあると感じた。TAG のように多くの人が集まる会が、すぐにできるかはわからないが。

月に実際に参加してみたTAGは、参加後に岡村勝行氏と連絡をとったときに氏が表現した「事実報告じゃなくて、という意味ぐらいで、新しいことをしよう、議論して前に進めよう」というのが当てはまる会であった。

日本版TAGは可能なのか。それを問う時にセミナーシリーズ第3回とWAC-8 Kyotoをふりかえると、筆者は悲観的にも楽観的にもなるが、完全に諦念の境地にいれば本セミナーシリーズを企画することもなかったし、本書を編むこともない。つまり、「現代『日本』考古学」には多くの人が漠然とした「危機」を感じて変化を希求している。それはセミナーシリーズ第4回以降も各ゲストスピーカーによって繰り返し語られ、より鮮明になった。